The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本在住ブラジル人労働者における社会的ネットワークと日本語の使用
Author(s)	ナカミズ, エレン
Citation	阪大日本語研究. 1996, 8, p. 57-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9630
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』8（1996）

日本在住ブラジル人労働者における社会的ネットワークと日本語の使用

Social Networks and the Use of Japanese in Spoken Discourse of Brazilian Guest Workers

エレン・ナカミズ
Ellen NAKAMIZU

キーワード：社会的ネットワーク，日本語使用，コード切り替え

1．はじめに

日本に在住しているブラジル人は20万人ちかくにのぼっているが，その大部分は労働者として来日した者である。80年代に「出稼ぎ現象」が始まって以来，日本の様々な地域でブラジル・ポルトガル語コミュニテイが形成され，社会言語学的な観点から調べなければならない課題が多く浮上してきている。

日本在住ブラジル人の大半は日系人であり，外面的には日本人とほとんど変わらないが，内面的には日本人との相違点が多く見られる。それらの相違点は様々な形で現れるが，最も目立つのがことばの使用である。日系人といっても，日本語と日本文化を受け継ぐ程度は人によって差があり，ことばによるコミュニケーションに様々な問題が生じるのである。

筆者は，これまで，日本在住のブラジル人労働者における言語実態や日本人との言語的なコミュニケーションの諸相というテーマに取り組んできた。そして，それを明らかにするために，二通りの研究調査を行なってきた。一つはブラジル人の日本語能力と，日常生活での日本人との関わり合いを調べるアンケート調査と，参与観察調査によるものである。もう一つはブラジル人と日本人がインターアクションする場面を基に，実際の談話

レベルでの双方の言語的な特徴や言語行動を取り上げるものである。

本稿では，ブラジル人の日本語能力および彼らと日本人との関わり合い，すなわちブラジル人が生活するにつれ形成した様々な社会的ネットワークに関するアンケート調査の結果を踏まえた上で，ブラジル人と日本人との会話の具体例を基にその社会的ネットワークと実際の言語行動との関係について論じてみたい。つまり，社会的ネットワークはブラジル人の日本語使用に大きな要因の一つであることを前提とし，それらの社会的ネットワークがどのようなものなのか，また談話レベルではどのようにブラジル人の日本語使用と結びついていくかを調べることにしたわけである。

社会的ネットワークについて論じるにあたって，まずブラジル人の日本語能力について簡単に触れておきたい。

2．在日ブラジル人の日本語能力

日本在日ブラジル人の大部分が日系人であることから，インフォーマントの「世代」が日本語能力に影響を与える一つの要因であるとみなされている。しかし，今回は，「世代」よりも話者の日本語歴を重視し，その日本語歴と日本語能力との相互関係を調べることとした[1]。

アンケート調査の結果から言うと，「大体理解できるが，特定の話題について長時間は話せない，あるいは少ししか話せない」という回答が多かった。ブラジル人は「受動的な話者」(passive speaker) に近い者が多いということもわかった。その大半が日系人であることを前提とすれば，この調査の結果を通じて，ブラジル日系人の日本語能力を窺い知ることができる。ここでは，外国人労働者であるブラジル人と受け入れ側の言語としての日本語との関係の特質について論じることにする。

日本在住ブラジル人と日本語との関係の特質は何か。その関係を明らかにするためには，他の外国人労働者，あるいは他の先進国の外国人労働者における言語実態と対照する必要があろう。日本でのブラジル人労働者とドイツやフランスのような外国人労働者を受け入れた歴史の長いヨーロッパ諸国でのトルコやアルジェリア国籍人との間には大きな違いがある。ヨー

ロッパでの外国人労働者はたいていの場合，受け入れ側の国に移住した時点で初めてその国の言語に接するのに対して，ブラジル人労働者の場合は，日本語の理解力及び会話力が低いことはあるとしても，何らかの形で，来日以前から日本語日本文化にさらされたことのある人が多いということである。ただし，それには世代や他の原因も絡んでおり，その日本語にさらされる程度は人によって，異なっている。そのために日本在住ブラジル人における日本語能力あるいは日本語でのコミュニケーション能力の複雑さが生じるわけである。

もちろん，世代につれ，日本語を維持する傾向は弱くなっていくが，「世代」という要因だけで日系人をめぐる日本語能力・日本語使用の諸問題を片づけるわけにはいかない。日系人の日本語能力と日本語使用の実態を調べる際に，各人がどの程度日本の価値観を受け入れたか，日本語自体の知識があるか，どの程度ブラジルへ同化しているかが問題となる。それを考えると，話者個々の「言語的な背景」を調べることが不可欠だと思われる。そうした「言語的な背景」を念頭に，「世代」と異なった角度から，新たに日本在住ブラジル人を，次のように分類してみる。

1）家庭で聞く・話す
- 正式な学習あり
- 正式な学習なし

2）家庭で聞く・話さない
- 正式な学習あり
- 正式な学習なし

3）家庭で聞かない・話さない，正式な学習あり

4）家庭で聞かない・話さない（来日後習得）
- 自然習得
- 自然習得＋正式な学習

本稿で視野に入れる正式な学習とは教師や教科書など，なんらかの方法を通じて，体系的に日本語を学習及び習得することを指す。一方，自然習得とは日本で生活するうち，周囲の人々との接触のみで，日本語を覚えていく過程を言う。正式な学習との主な相違点は日本語の習得が体系的に行なわれないということである。

上の分類に沿って，ブラジル人の言語的な背景を厳密に調べるとすれば，話者個々人が来日以前と来日後，日常生活の中で，誰と日本語を話したかを知ることが必要になってくる。つまり，話者個々人の社会的ネットワークを辿ることが欠かせない条件の一つなのである。ここでは，まず「社会的ネットワーク」という概念を応用するが，社会的ネットワークとはどのようなものであるかを次に考察してみたい。

3．在日ブラジル人における社会的ネットワーク

3．1　社会的ネットワークとは

「社会的ネットワーク」(social network) という概念は社会学者 Barnes がノルウェーにある小さな町，Bremnes での社会的な構造を明らかにするための手段として導入したものである。当時，社会階級 (social class) などのようなマクロレベルでの抽象的な概念が重視されていたわけであるが，Barnes は一対一の具体的なインターアクションに焦点を当てた。それ以来，数多くの社会学者，社会言語学者がこの概念を応用している。

社会言語学の分野では，あるコミュニティの個々の話者が個人として形成するネットワークが彼らの言語行動に影響を与える要因とみなされている。代表的な研究に Milroy (1987) がある。Milroy は「社会的ネットワーク」を基に，Belfast の労働階級コミュニテイの話者が持つネットワークの性質がどのように彼らの言語行動パターンやその地域の言語的規範の維持と関係しているかを詳細に調べた。

最近，社会的ネットワークの概念が移民コミュニティに関する社会言語学研究にも広く応用されている (Barden & Groβkopf, 1994; Milroy & Wei, 1995; Dabène, 1995 など)。一般的な傾向として，それらの研究は話

者が持つ社会的ネットワークの構造とその話者による「heritage language」と「受け入れ先の言語」への切り替え（code-switching）のパターンに密接な関係があることを明らかにしている。

本研究は日本在住ブラジル人労働者の社会的ネットワークを調べた上で，そのネットワークとブラジル人の日本語での言語行動との関係を明らかにしたいと思う。ここで扱う社会的ネットワークとは，ブラジル人が個人として日常生活の中で接する日本人やブラジル人との何らかの関わり合いを指す。それを探るには，ブラジル人個々が日常に行なう様々なインターアクションを考慮に入れる必要があるであろう。すなわち，毎日，どのような場で，だれと，どのようなインターアクションを行なっているのかを調べることである。

ブラジル人労働者が形成するネットワークは，大まかに2つの領域に分けることができる。その領域は「職場内」と「職場外」である。この二つの領域でのネットワークにははっきりとした区別，異なったパターンが見られることが予想される。

3．2　「職場内」におけるネットワーク

職場に同国人が多いか少ないかに関係なく，ブラジル人と日本人との間でなんらかの言語的なインターアクションを頻繁に行なうケースが少なくない。

ただし，そこにはネットワークにおける「頻度」と「親密度」の概念も絡んでくる。日本人の同僚と話す頻度は高いかもしれないが，双方の親密度はそれほど高くないことが明らかとなった。アンケート調査の結果によると，職場の同僚との付き合いは「短い話」にすぎないと答えた人が過半数を上回る。その「話」の具体的な内容については，「仕事」と「ブラジルでの生活」が最も多くあげられた。「ブラジルでの生活」は日本人側の好奇心によって取り上げられる話題だという。

3．3 「職場外」におけるネットワーク

日本人の同僚とは職場外までの連続が見られないが，一方ではブラジル人の同僚とは職場外でも親密な関係を保っているという傾向のあることがわかった。

また，職場外において日常行なうなんらかのインターアクションの相手及びそのインターアクションの性質を調べたところ，「自宅の近所の人や近所の商店の人と挨拶をする程度の付き合いはある」との回答が目立ち，「ほとんど接することがない」との答えの方が多かった。

休暇の過ごし方に関しては，「自宅で過ごす」と「ブラジル人の仲間と一緒に過ごす」ことが一般的な傾向のようである。

職場の内・外を基準に線引きをし，ブラジル人におけるネットワークの全体的な構造を展望してみると，社会領域によって，あるパターンのネットワークが成り立っているわけだが，それに伴って，ブラジル人の言語行動が左右されると考えられる。次の表はブラジル人の各社会領域におけるインターアクションの相手と使用言語を示したものである。

表1

社会領域	インターアクションの相手	使用言語
家庭	家族，親類	ポルトガル語
仕事	日本人同僚，上司 ブラジル人同僚	日本語 ポルトガル語
遊び	ブラジル人の友人	ポルトガル語

仕事以外の領域での日本語使用が少ないことがブラジル人の日本語習得とディスコースレベルでの実際の日本語使用に大きな影響を及ぼすと考えられる。次に，社会的ネットワークと日本語使用との関連について考察してみよう。

4．社会的ネットワークと日本語使用－ブラジル人と日本人との相互作用場面

日本人とのネットワークが職場に限られているということはそれ以外の

領域で日本語に触れることが非常に少ないということである。それがどのようにブラジル人の日本語使用と関係してくるかを見てみたい。

製造工場で働いている大半のブラジル人は仕事上でことばを使用する頻度が低い。特に雑音が多く，注意深い作業をする場所では必要な時しか，ことばを交わさない。工場での言語的なやりとりは単純命令や単文を相手に投げかけることにほぼ限られる。つまり，ことばを簡略化せざるを得ない環境なのである。他の領域で日本語にほとんど接しないブラジル人は「職場で習得したバラエティ」のみを用いるようになる可能性がある。そこで，彼らの日本語，あるいは日本語でのコミュニケーション能力が化石化することも考えられる。

ここで，ケーススタディとしてブラジル人と日本人がインターアクションする場面を見てみよう。インフォーマント（以下 B1）は日本語をある程度自然習得してから，ボランティアグループの日本語教室で正式な学習を受けはじめた。ここでは異なる年齢の日本人の話し相手 2 人との一対一の会話の中で，B1 がどのような基準で自己とそれらの話し相手との相互関係を捉えているか，話し相手によって，待遇表現を使い分けているかどうかなどの特徴を抽出し，社会的ネットワークと結びつけながら，分析する。

4．1　B1 のネットワークについて

B1 は 30 代前半の二世男性である。父母が準一世であり，幼い頃は日本語を聞くことが多かった。ただし，自分からは積極的に話したことがなかったし，正式な学習も受けたことがなかった。非日系人の友人が多く，家庭以外の領域ではポルトガル語のみを使用していた。

日本在住期間は 5 年であり，3 年前から日本語を独習[2)]しはじめた。また，滋賀県草津市内のボランティアグループが主催している日本語教室で日本語を習いはじめて 1 年ほどになる。ちなみに，その日本語教室は 1994 年 7 月に開始され，週に一回，2 時間授業をする体制にある。主に，草津市やその周辺に住んでいる外国人労働者を対象としている。生徒数は

50名であり，ブラジル人がそのほとんどである。なお，教える側であるボランティアの人の中には日本語教育の経験を持っていない者も多い。

B1の日常生活は大体自宅と職場の往復に限られている。日本語教室に行く以外は自宅で余暇を過ごすことが多い。また，職場で最もよく接する人は自分の上司であるが，他にパートとして雇われている地元の中年の女性もしばしば話しかけるという。いずれの場合でも，地元の方言が使用されていることを確認した。

B1は，来日後日本語での会話ができるようになり，意識的に日本語能力を向上させようと努力している。これを考慮に入れながら，以下，普段，相手によるコード切り替えを意識しているか，実際にそれを行なっているかを中心として，二つの会話をめぐって，調べる。まず，調査法につて説明しておこう。

4．2　調査法について

ここでは，ブラジル人の話者が話し相手による表現の使い分けを意識しているかどうかを調べる。意識しているとすれば，どのような基準で使い分けをしようとしているか，彼が属しているネットワークはそれとどのように関係してくるか，などの疑問点を出発とし，B1と日本人の話し相手，それぞれとの一対一の会話を収録した。なお，会話が行なわれた状況はほぼ同じであり，そのトピックも同一であった。

B1も積極的に会話に参加できるように「日本での生活と日本とブラジルとの違い」という，ブラジル人にとって展開させやすいトピックを選択した。会話の録音時間はほぼ30分であった。

各会話に参加した日本人の話し相手は21才の年下の女子学生（以下J1）と50代後半の年上の主婦（以下J2）であった。双方ともB1と初対面であった。

4．3　B1の日本語使用に見られる特徴

日本語での敬語の使い分けを規定する条件として「外的条件」と「内的

条件」がある。言語体系の制約などを含む内的条件に対して，外的条件とは「ことばの世界の外の物事」を指す（南1989）。これらの条件は，広い範囲で考えれば，待遇表現の使い分け及び場面によるコード切り替え[3]も制約していると言えるだろう。これは，日本語だけではなく，どの言語でも同じようである。その言語のネイティブスピーカー（以下NS）なら，それらの条件は把握しており，それによってその場その場の表現形式を選択するはずである。ノンネイティブスピーカー（以下NNS）もまったくそれらの条件を知らないわけではない。ただし，母語にある条件についての知識，さらに様々な言語的及び非言語的な要因が働いているため，ネイティブスピーカーとは異なる行動をすることが予想される。

本節では，会話からの例を挙げながら，B1の日本語使用に最も影響を与えると思われた要因をまとめておきたい。

(a)　丁寧語

丁寧語の使用は両方の会話に見られる。NSに意見を尋ねたところ，それらの使用はその場面に適切だとされた。特に，J1との会話では質問と応答という隣接ペアーが連続しており，その場合には「丁寧体」がかならず現れる。

(1)　B1：Kさんは何やってますか。
　　J1：ええと，今は大学3年生です。

(2)　J1：うん。どこか行ったことありますか。
　　B1：僕は，まあ，日本以外はイギリスに行ったことあります。

J2との会話でもB1は「丁寧体」を使用するが，J1との会話ほど出現頻度は高くない。それは会話の展開が異なるためで，質問・応答という隣接ペアーが少ないからであろう。

B1による丁寧体の使用は意識的なものだと思われる。生活している環境の中で使用することは多くないが，自然に覚えたというよりも教科書を通じて独習したということを確認した。

(b) 方言との混在

B1 は同じ発話の中でも「丁寧体」と関西弁の要素をしばしば使用している。

(3) J1：英語のニュースとか聴いても，全然わからないから。はやくて。

B1：で，やっぱり，あの，たくさんの専門的な単語が出てきますから，だから，単語を覚えるにはたぶん一番いい方法か，わらんけどなあ。[4)]

「～ね」に対応する「～なあ」の使用は文中でも文末（やなあ＝ですね）でも多く見られた。つまり，改まったスタイルにふさわしいと思われる「丁寧体」と地域方言でのくだけたスタイルに使われる「なあ」とが B1 の発話の中に併存しているわけである。次に，J2 との会話の一部を見てみよう。

(4) J2：あ，そうですか。それ面白いですね，やっぱり。そういうことを感じられると言うのは，あの，やっぱり，外国の方が日本で，日本の国の人の行動とか，あの，話し方とか，そういうことを見て，すぐ違いを感じられるね。

B1：それから，まあ，できるほど，まあ，高い声で話しないように，まあ，あまりストレイトで自分の考えをなあ，まあ，傷，相手に傷つける可能性があるからなあ，たまにそれもありますから[4)]。

(5) B1：（就職先の面接について）［中略］うん，ブラジルだったら，自分の考えを聞いてるわけ | なあ， | それで，あ

J2： | うん，そう，そう |

あの，人数が多い時は，もう，もう，あの，どうしての，（聴取不能）みたいなものなくて，それで，1 人ずつなあ，表現せなあかんわけやなあ。もう，ものすごいきついと思うやなあ。

B1に尋ねると，標準語と方言とを区別していないと言う。方言的な要素を丁寧体と交えているのがその証拠の一つであろう。また，B1の発言に現れる方言的な要素は主に職場で自然に習得されたものだと思われる。一方，日本人話者は双方とも明らかに方言の使用を回避した。形式上では方言と認められるものは少なかった。おそらく，その理由の一つはその会話が録音されている場面であったということである。もう一つは話し相手のB1が外国人だと意識しているからであろう。

(c)　話し相手によるコード切り替え

ここまで挙げた特徴は両方の会話で現れた。J1とJ2との年齢が離れているにも関わらず，B1の双方へのことばの上での扱いには差が見られない。つまり，「年齢」はコード（スタイル）切り替えを起こす要因にはなっていないということである。

日本人同士がまったく同じ状況にいるとすれば，「年齢」が待遇表現及びコードの切り替えと関係してくるはずである。NSに尋ねたところ，年上のJ2に対しては，尊敬語などを含むより改まったスタイルを使用するという。B1にとっては，年齢によって決まる一種の上下関係よりも，親疎関係に基づく「心理的な距離」（南，1987）が最も話し相手への対応に影響を与える要因である。それはB1だけではなく，ブラジル人の一般的な常識を反映していると思われる。

B1の発言によると，年下のJ1よりもJ2の方が親しみやすく，スタイルを気にせずに話せた相手であったという。しかし，その心理的な距離の差は実際の待遇表現，スタイルの切り替えよりも会話の展開において表れているのではないかと考えられる。ここでは，会話の展開について詳しく述べることはしないが，若干述べると，J1との会話に多く見られた「質問・応答」パターンの展開に対して，J2との会話ではあるトピックについてお互いに話し合い，話題の転換がよりスムーズに行なわれていると思われる。しかも，B1が積極的にトピックを提供し，家族などについての個人的な話を進める意志を見せている。

(6) B1：多分，ポルトガル語を勉強してますから，いつかブラジルか，ポルトガルに行くつもり

J1：　　そうですね。行けたら，いいですね。日本に初めて，いつ来たんですか。

B1：ああ，僕は，平成2年7月25日，だから，もう

J1：5年ぐらいですね。

B1：うん。

(7) J2：…ノーベル賞をもらったでしょう。あの時，日本人は曖昧な日本人，ということでスピーチされたでしょう。あーいーまーいな日本人

B1：あいまいって?

J2：あいまいっていうことね，はっきりしないって，ね。

B1：それは，まあ，僕はなあ，あの，まあ，日本で暮らしてるから，まあ，僕はまあね，外国の国から来たから，まあ，僕がその，そのどうしての，その文化に合わせてなあ　うん　心を

J2：

合わせて　うん　まあ，暮らさなあかんけど…

J2：

次の表2で示したように，形式上ではどちらの会話でも，同じような表現の使用が見られるに対して，会話の構造，つまり展開のレベルでは大きな違いが見出せる。

表2：それぞれの会話に見られる特徴

	B1／J1	B1／J2
隣接ペアー（質・応）	22	5
文中の「なあ」	21	21
文末の「動詞＋やなあ」	15	5

5．まとめ

以上，ブラジル人労働者の背景と彼らが来日後形成した社会的ネットワークの性質を見わたし，そうしたネットワークとブラジル人の日本語使用の関係に着目してみた。母語と同様に，外国語の場合でも，話者が持つ社会的ネットワークがその外国語の使用に直接影響を与えるという仮説を談話レベルで実証した。

結果として，コード切り替えに関しては，話し相手によるスタイル切り替えが見られなかった。また，「年齢」による使い分けをする意識もないという結論も導き出せた。B1 にとっては話し相手の 2 人とも初対面だったことの方が重視されたようであり，そのため丁寧体を意識的に使用していた。なお，在住している地域の，くだけた場面でしか使用されない方言形式がいずれの会話にも多く出現した。インフォーマントに確認したが，それは，おそらく職場で自然習得したスタイルだと断定してもよいと思う。ここで注目したいのは，表 2 で示したとおり，出現する表現形式及びその位置が決まっているということである。それらの表現形式は化石化しているのだとも考えられる。この点については，さらに深く追究する必要があろう。

また，各場面の条件に関しては，「年齢」よりも話し相手との「心理的な距離」がブラジル人話者の行動を左右すると思われる。だが，それはコード切り替えによってではなく，会話の運び方に表れているものである。

注

1）ここでのアンケート調査については，ナカミズ（1995a）を参照のこと。

2）「独習」という用語は正式な学習との対比の上で，使用している。

3）本稿で扱うコード切り替えは主に場面や話し手によるスタイルの切り替えを指している。

4）B1 による文法的な誤用は訂正していない。

参考文献

梶田孝道（1994）『外国人労働者と日本』日本放送出版協会

国立国語研究所（1994）『ポルトガル語の話しことばの諸相－日本語とポルトガル語との社会言語学的対象研究』中間報告(1)

ナカミズ・エレン（1995a）「在日ブラジル人労働者の言語生活－在日ブラジル人の社会的ネットワークと日本語使用との関連」『ポルトガル語の話しことばの諸相－日本語とポルトガル語との社会言語学的対象研究』中間報告(2)

――――――――（1995b）「在日ブラジル人と日本人との接触場面－会話におけるコミュニケーション問題」『世界の日本語教育』第５号 国際交流基金日本語国際交流センター

南不二男（1989）『敬語』岩波新書

渡辺雅子（1992）「ブラジルからので稼ぎ労働者の『日本』との出会い」『社会調査実習報告書』vol. 8 3月 明治学院大学社会学部社会学科

Barden, B. & Großkopf, B (1994) "Ossi meets Wessi: social and linguistic integration of newcomers from Saxony", *Intercultural Communication - Proceedings of the 17th International L. A. U. D. Symposium Duisburg, 23-27 March 1992*, pp. 471-480. Peter Lang.

Barnes, J. A. (1954) "Class and Committees in a Norwegian Island Parish", *Human Relations - Studies towards the Integration of the Social Sciences*, pp. 39-58. London: Tavistock Publications.

Dabène, l. & Moore, D. (1995) "Bilingual speech of migrant people", Milroy, L. & Muysken, P. (eds.) *One speaker, two languages: cross-disciplinary perspectives on code-switching*, pp. 17-44. Cambridge U. P.

Fishman, J. A. (1986) "Domains an the Relationship between Micro- and Macrosociolinguistics", Gumperz, J. & D. Hymes (eds.) *Directions in Sociolinguistics*, pp. 435-453. New York: Basil Blackwell.

Kim, Y. Y. (1986) "Understanding the social structure of intergroup communication: a personal network approach. Gudykunst, W. B. (ed.) *Intergroup Communication*, pp. 86-95. London: Edward Arnold.

Milroy, L. (1987) *Language and Social Networks*, Oxford: Basil

Blackwell.

Milroy, L. & Li, Wei (1995) "A social network approach to code-switching: the example of a bilingual community in Britain", Milroy, L. & Muysken, P. (eds.) *One speaker, two languages: cross-disciplinary perspectives on code-switching*, pp. 136-157. Cambridge U. P.

Neustupný, J. V. (1988) "Problems of English contact discourse and language planning". Paper presented at the *1988 Regional Seminar on Language Planning in a Multilingual Setting: The Role of English*. National University of Singapore, 6-8 September, 1988.

Suzuki, T. (1987) "As Expressöes de Tratamento da Língua Japonesa no Brasil: uso e processo de aculturação", *Estudos Japone-ses VI, Revista do Centro de Estudos Japoneses da USP*, Säo Paulo.

（大阪大学文学部日本語学，社会言語学）